【秋元論文へのコメント】

ASDのある大学生へのコーチングの有用性

高　橋　知　音

日本の高等教育機関では、発達障害の中でもASDのある大学生の割合が高く、カウンセリングやスキルトレーニングによる支援が提供されているものの、効果的な支援方法が確立しているわけではない。カウンセリングやスキルトレーニングなどに関する報告もあるが、秋元氏が指摘するように課題も多い。そうした中、コーチングの有用性が示されれば、支援における貴重な選択肢となる。

発達障害のある大学生へのコーチングは米国を中心に行われているが、その対象は主に注意欠如多動症（Attention Deficit Hyperactivity Disorder: ADHD）のある学生であり、自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）のある学生を対象とした報告は限られている（O'Grady, 2019; Rando, Huber, & Oswald, 2016）。Randoら（2016）の報告は米国の大学での実践を紹介したものであり、効果の評価も主に成績や簡単な満足度の調査で、ASDの学生にとってコーチングがどのように機能したのか、詳細は不明である。O'Grady（2019）は大学生を対象としたコーチングの効果の検証を目的に、4回のコーチング・セッションの効果を報告したものであるが、評価の対象は自己意識と目標設定に限定されている。

これらに対し、秋元氏がこれまでに発表してきた実践報告（秋元, 2019; 2020）は、学生の変化を詳しく紹介し、コーチングがASDのある大学生の支援においても有効であることを示す、意義のあるものであった。一方、いずれの論文も一事例の報告であり、ASDのある大学生への有用性を議論するには限界もあった。本論文は、7名の学生が2名のコーチから受けたコーチングの経験についての聴き取りの結果を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析している。実施期間も4ヶ月から32ヶ月と多様であり、先行研究と比較しても、ASDのある大学生のコーチングについてより汎用性のある知見が得られたと言って良いだろう。

主な知見として、ADHDのある大学生へのコーチングで見られる自己決定の促進、自己肯定感の向上といった効果が、ASDのある学生においても見られるということが報告されている。また、目標達成に向けたモチベーションの維持や、自己理解の促進なども効果としてあげられている。これらの多くは、ASDのある多くの大学生が直面する課題であり、卒業後の社会的自立に向けて取り組むべき重要なテーマである。

本論文は、ASDのある大学生へ支援技法としてコーチングが効果的な支援方法であるというエビデンスを示している点で、たいへん貴重なものとなっている。今後さらに実践、研究が蓄積され、コーチングがASDのある学生が社会で活躍する力をつけていくための支援ツールとして、広く用いられるようになることを期待したい。

【文献】

秋元 孝城(2019):自閉スペクトラム症の学生に対する「コーチング」の実践.明星大学発達支援研究センター紀要MISSION,(4),45-60.

秋元 孝城(2020):発達障害のある学生に対するコーチングの効果:自閉スペクトラム症のある学生を対象とした実践と効果に関する一考察.明星大学発達支援研究センター紀要MISSION,(5),43-54.

O'Grady,M.(2019):A Study on the Impact of Life Coaching in enhancing the potential of young adults with diagnosis of Autism to better manage transitions. The Ahead Journal,9.

Rando,H.,Huber,M.J.,& Oswald,G.R.(2016):An Academic Coaching Model Intervention for College Students on the Autism Spectrum. Journal of Postsecondary Education and Disability,29(3),257-262.

Tomone Takahashi：信州大学学術研究院（教育学系）